

が多数見られた事は、検査時期についても一応妥当な線を示している。

42. 判別関数による肝シンチグラフィの評価

○前田 知穂 小川 央顕 村上 晃一
(京都府立医大・放)
熊野 町子
(神大・放)

目的 線形判別関数法で肝シンチグラムの多変量解析をコンピューターを用いて行い、肝シンチグラフィの診断的価値を検討した。

方法 ^{198}Au -colloid 300 μCi を用い、有効肝血流指数測定後、肝正面及び右側面シンチグラフィを行った。対象は全て病理学的に確認された正常肝20例、急性肝炎22例、非活動型慢性肝炎21例、活動型慢性肝炎24例、甲型肝炎硬変15例、乙型肝炎硬変18例の6群計120例である。これらの症例で有効肝血流指数を加え、肝シンチグラムより、脾像の出現度、脾腫大の程度、正面及び右側面像での骨髄像の出現、肝正面像、右側面像の型態的变化等の7項目にそれぞれ3~7のカテゴリーを定め、32の変量とした。更にこれにダミー値を与え、判別関数法により多変量解析を行った。使用したコンピューターはNEACシリーズ2200 Model 500である。

結果 正常肝90.0%、急性肝炎81.8%、非活動型慢性肝炎71.4%、活動型慢性肝炎79.2%、甲型肝炎硬変93.3%、乙型肝炎硬変77.8%のコンピューターによる正診率が得られた。又、肝機能成績のみを用いた慢性肝炎のこれら二群の正診率は、肝シンチグラムのそれより約10%低い値であった。

結語 今回は全例をトレーニンググループとして用いたが判別関数法によって肝RI imageの診断的価値を明らかにし得た。今後画像処理法を用い、より正確な所見を把握を行えば、尚一層高い診断的価値が得られるものと思われる。

43. $^{99\text{m}}\text{Tc-Sn-Colloid}$ による肝RI検査

木村 和文 久住 佳三
(阪大・中放)
○西村 恒彦 吉川 俊之 井上 通敏
梶谷 文彦 稲田 紘 林 隆一
北畠 顕 伯耆 徳武 高杉 成一
堀 正二 武田 裕
(阪大・1内)

$^{99\text{m}}\text{Tc-Sn-Colloid}$ および $^{198}\text{Au-Colloid}$ による肝RI検査を行い、肝内限局性病変、ヒマン性病変における診断的意義について臨床検討を試みた。臨床診断が明確な各種肝疾患患者について Tc-Sn-Colloid 2mCi、および $^{198}\text{Au-Colloid}$ 200 μCi を静注し、経時的採血により血中消失曲線をシンチカメラとRIデータ処理装置を用いて、肝イメージおよび肝RI集積曲線を、シンチスキャナーを用いて、肝シンチスキャン像およびシンチフォトを求めた。全症例23例において、 Tc-Sn-Colloid では脾影を認めた。肝硬変例では、骨髄の描記も認めた。限局性疾患である肝癌の描記は Tc-Sn-Colloid では計数率が高く明瞭な欠損像を認め、転移癌では $^{198}\text{Au-Colloid}$ で見出しえなかった左葉内欠損を Tc-Sn-Colloid で捉えた症例もあった。RI集積曲線は $^{198}\text{Au-Colloid}$ では $T_{1/2}$ が、各種疾患により分かれるが $^{99\text{m}}\text{Tc-Sn-Colloid}$ では疾患による差異が明瞭でなく、立ち上りが急峻で10分内外でプラトーに達した。基準化したRI集積曲線において $^{99\text{m}}\text{Tc-Sn-Colloid}$ では肝・脾集積曲線はほぼ一致するが、 ^{198}Au -コロイドでは、肝硬変例において脾の方が肝より集積の勾配が大きく、 $^{198}\text{Au-Colloid}$ の方がとりこみの態度は特異的と考えられる。肝癌の部位において基準化集積曲線の立ち上りが急峻であり一見Hyper functionに思えるが、とり込み細胞数が減少しただけでとり込み係数が一定でも、この曲線が解釈できることを、コンパートメントモデルにおいてコンパートメント数が減少した条件下で、シミュレーションを行うことにより求めた。